

昭和44年度
(1969)
第9回大会

男子優勝 札幌西

女子優勝 札幌静修

【 専門委員長 寸評 】

高体連誌 誌面の都合で掲載なし

優勝のよろこび

男子 札幌西高等学校

僕達の目標は、去年決勝リーグまで進みながら果たすことのできなかつた団体優勝を勝ちとることにありました。目標は大きくかつ、優勝が決定するその瞬間まで予断を許さないものだっただけに、その喜びはひとしおでした。

僕達は、去年の高体連が終ってから、夏休みの合宿・冬季間・冬休み中の屋内での基礎トレーニング、春休みの体育館での練習と、ずっと優勝を目指して頑張ったのです。春の雪解けと同時に今シーズンがやってきました。西高はコートを2面持ち、他校よりも条件が良かったのが幸いでした。しかし、我がクラブでも、3年生の部員がわずか2名で、これは大きなハンディキャップだったのです。去年も同じく2名でした。そして去年は2位にとどまったのでした。今年も、もう一人いたらと思うことも何度かありました。しかし、その穴を2年生が十分にあり余る程うめてくれました。決勝などは、ポイントをあげたのは2年生だった程ですから。そしてもう一つの大きな力は、先輩の力でした。大会が近くなつてからは、度々練習をつけに来てくれ、技術面、作戦面、そして精神面と絶対的な確信のなかつた僕達ただだけに、先輩の存在は大きな力となりました。

そして、今度の優勝を顧みて、それが、単なるまぐれでなく、そういった西校の伝統の上に立ったものだということを知つて3年生の僕としては、なお一層嬉しい思いがするのです。

(札幌西校 佐藤 淳一)

優勝のよろこび

女子 札幌静修高等学校

「優勝」私はこの言葉を聞くととき、そして口にすると、心がギュッと引き締まります。そしてなんといっても6月19・20日に円山テニスコートで行われた全道大会を思い起こします。あの日は太陽カンカンと照る日で、皆汗だくになり、顔を真っ赤にして走り回ったあのコート、大きく見えた太陽、そして優勝が決まった時は嬉しさとまだ湧かない勝利の実感とが入り交じって、皆で呆然としていた状態だったことを私は一生忘れることはできません。優勝カップや賞状などを目の前にしてもまだ信じられませんでした。皆も嬉しさを顔いっぱいにしていました。この感激の一瞬は、今まで見つけ出せなかった宝物をやっと見つけた時の気持ちにもたとえられるでしょう。これも先輩から受け継いだ素晴らしい伝統を汚すまいと、冬季の辛かったトレーニングや屋内での短い貴重な練習において、クラブ全員が少しずつでも人間的に又選手としても上達したいと願いながら努力した結果と信じています。

又、私達は中島の札幌庭球協会に属し、一般の方々とも接して多様な技術を得、先輩の豊富な経験を吸収しクラブ員が闘志を抱いて練習に打ち込んだことなどが一体となったからこそ優勝の喜びにたどりつくことができたのだと思っています。前日には「風邪のため調子が悪い」などという人も出て一時は心配もしましたが、当日にはケロリとした顔でコートに現れ、皆のこの試合への闘志がうかがえるようでした。そして大きな試合というよりいつもの練習といった様子で、皆落ち着き払っていました。そのおかげで、そして諸先輩や先生、クラブ全員の応援のおかげもあって、強敵といわれていたチームともあせらず着々とゲームが進められたのでした。

私はこの優勝を、この場だけで終らせるのではなく、これからの生活においてもこの経験を生かしこの言葉を深く噛みしめて行きたいと思います。

(札幌静修高校 高橋 珠里)

全国高校総体 (第59回全国高等学校庭球選手権大会)

栃木